カルチャースタディーズ研究所では、杉並区の商店街振興の補助金を受け、杉並区を散歩して深く探訪し、かつ商店街で買い物をしてもらうための冊子「ふかすぎ」を2015年２月末に発行しました。
ここではその一部を紹介します。

「ふかすぎ」のコンセプト

　杉並区は昭和七年の成立以来、主に住宅地として発展してきた。しかし、それ以前も、大宮八幡、井草八幡などに象徴される長い歴史があり、縄文遺跡も多い。神田川、善福寺川などの河川を軸とした自然も豊かであり、鎌倉時代の古道もある。
　一方で、読書好きが多く、書店、古書店も豊富。最近はブックカフェも増えている。サブカルチャーが盛んであることは言うまでもない。
　居酒屋もたくさんある。和菓子、せんべいなどの日本のお菓子屋さんに加えて、近年は新しいパン屋、ケーキ屋が増えてきた。甘党も辛党も、おいしい店ばかりである。そして、どんな店にも、こだわりがある。
　自然も歴史も住宅もお店も、深い。それが杉並だと思う。その杉並を深く探訪する。

それでは「ふかすぎ」の一部を公開します。
校正前のpdfですので、本物が欲しい方は
西荻の信愛書店、タスカフェ、ベコカフェ、ルモンヌ、えんつこ堂、ていねいになどで無料で配布していますので、おたずね下さい。

ただし、好評につき、在庫僅少です。

ふかすぎ

杉並を深く探訪する

杉並という土地の謎は深い 5

杉並の地形 6

杉並の暗渠を探検する 8

同潤会を知っていますか 16

今和次郎の阿佐ヶ谷家屋調査地帯を歩く 18

古道を自転車通勤する 20

意外かも知れませんが、私の田舎、ふるさとは杉並です。 22

杉並の食べ物は深い 23

パンを愛するパン屋さん 24

しあわせ和菓子手帖 28

シェアしてつながるブックカフェ 32

入りにくいけどうまい店 34

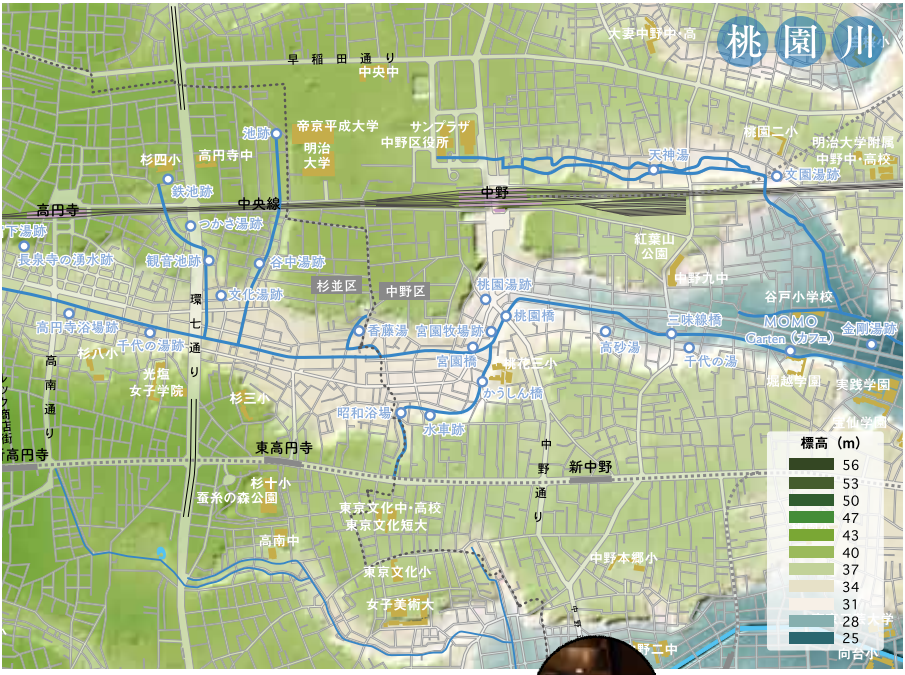
表紙写真＝山田智子　取材協力＝高橋の酒まんじゅう
目次写真＝水野哲也

もくじ

杉並の建築は深い　41
地域に開かれた新建築　インタビュー　42
いいビルマップ　46
レトロな名邸宅　51
神明中学オブジェの謎　54
西荻窪の街フォント　56
Foresta Lumina nishiogi　ひかりのにわ　63
はじめに　4
編集後記　64

イラスト　宇田川新聞
デザイン　水野哲也（Watermark）

※本書のノンブルは杉並区の街フォント（p56参照）を使用しています



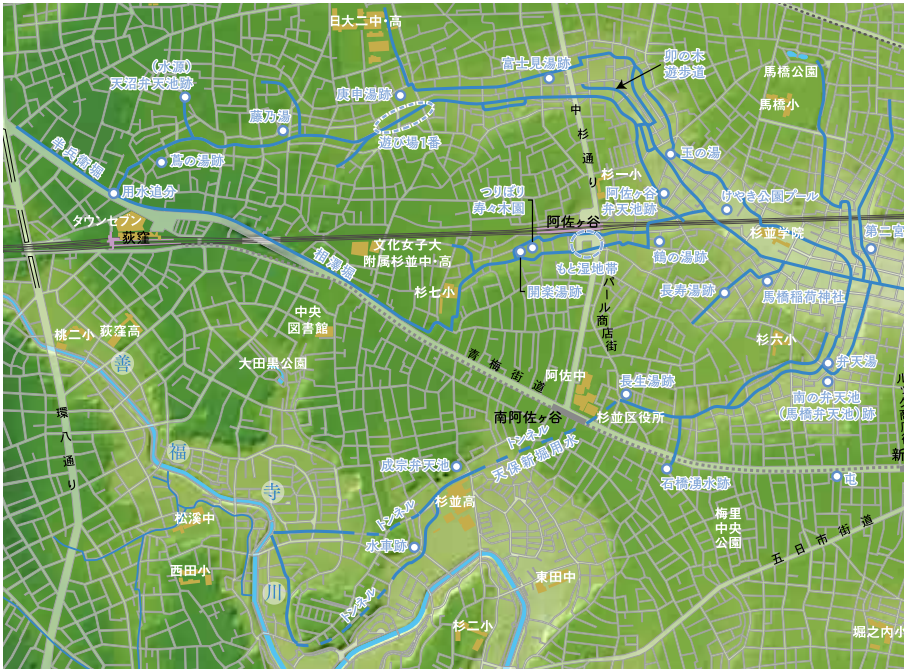
杉並の暗渠を探検する

文・写真　吉村生

暗渠のみつけかた

暗渠とは、おおざっぱにいえば、むかし水路（河川・用水路など）が流れていた場所のことである。杉並区にはかつて、善福寺川や神田川のほかにも、いくつもの河川や水路が存在していたが、概ね昭和30～40年代に姿を消した。桃園川、松庵川、井草川、小沢川、それから上水系では玉川上水や千川上水から引かれた六ヶ村分水（半兵衛堀、相澤堀はその一部）などがそれにあたる。地図からは消えて、道路などになっている。

しかしその場所に行ってみると、かつて自分は川でしたと言わんばかりの、さまざまな痕跡に出逢うことができる。それを暗渠愛好者の一部は暗渠サインと呼び、暗渠をみつける目印にしていたりする。杉並区でよくみる暗渠サインは、遊歩道、橋跡、マンホール、車止め、銭湯、蛇行する道、コンクリートの蓋、クリーニング屋さん、背を向ける



家、立ち入り禁止の空間など多数ある。なかでも、遊歩道という文字が書かれた金太郎印の車止めは杉並オリジナルの貴重なものだ。また、水路に掛けられていたコンクリートの蓋がそのまま残っているものも、杉並に比較的多い。暗渠サインとは、川と関連する施設であったり、川そのものの名残であったりし、これらを探そうと目を凝らしながら歩いてみるだけでも、景色を一変させてくれるアイテムたちである。

◎桃園川

荻窪にあった天沼弁天池を水源とし、阿佐ヶ谷、高円寺を通って神田川に注ぎ込んでいた川。阿佐ヶ谷では駅近辺を堂々と通っており、地名の由来にもなっている。かつては豊富に湧水があり、途中からも多くの支流が注ぎこむ、田んぼの中をはしる農業用水路だったが、しだいに水源のみでは流域の用水をまかなえなくなってゆき、江戸時代に千川上水や善福寺川から人工の水路をつなげて取水した経緯があるため、その流

同潤会を知っていますか

文　三浦展

杉並区には同潤会が五つもある。数としては東京二十三区で最も多い。同潤会というと表参道や代官山にあったアパートが有名だから、それが杉並区にあったのかと不思議に思うかもしれない。しかし同潤会はアパート以外にも各種の住宅を造ったのだ。

そもそも同潤会って何？　というと、関東大震災で世界中から集まった義援金を元につくられた財団法人。住宅の近代化を進めるべく、昭和七年までは旧東京市内だった地域では鉄筋コンクリートのアパートを中心に建設。市外だった杉並、荏原、赤羽、北千住などでは、分譲住宅と賃貸の「普通住宅」というものを建てた。普通住宅は二階建ての建物を縦に分割し

て二世帯か三世帯で住むもの。杉並には分譲住宅地が三カ所、普通住宅地が一カ所、それから震災後すぐにつくった仮設住宅の「仮住宅」が方南町にあった。

普通住宅地があるのは東京女子大の東側。国土地理院の一九四一年の写真で見ると長方形の敷地にずらりと家が並んでいる。そこから東に善福寺川を渡ると井荻八幡の南側に扇型の敷地がある。これが分譲住宅地。もう二つは荻窪駅北口の日大附属高校の北側と、さらにその西北のT字型の敷地（一九四四年）。仮住宅があったのは甲州街道北側の扇状の敷地である（一九四七年）。

街区として見て面白いのは普通住宅地だろう。桜並木があり、中心には酒屋などの商店があり、今も祭りが開かれる。この街並が好きでわざわざ引っ越してくる人もいるようだ。

 写真提供：国土地理院

古道を自転車通勤する

大島芳彦（ブルースタジオ）

建築家で、リノベーション業界の中心人物である大島さん、浜田山の自宅から東中野の会社まで杉並の古道を自転車で通勤している。今回はお子さん連れでボタリングしてもらった。

堀ノ内と東中野。その間を行き来するようになって40年以上。堀之内にはかつて祖父母が暮らした両親の家があり、東中野には15年前から僕の事務所がある。僕は東中野に生まれ15歳までそこに暮らし、今暮らしているのは堀ノ内の少し西、浜田山。

慣れ親しんだこの2地点間は鍋屋横丁から妙法寺に向かう古の参詣路と重なる。そしてその道周辺には幼い頃から今に至るまで僕の心をさわがせ続けるランドマークが点在する。大宮八幡宮にはじまり熊野神社にお祖師様（妙

大宮八幡

パンを愛するパン屋さん

文・写真　西牟田奈々

パン屋さんは地元住民にとって、とても身近な場所である。朝早くから店を開けてほしいと願ってしまうが、パン屋さんはとても大変な職業だ。その中には、女性が一人で切り盛りするパン屋さんも多い。おいしいパンへのこだわりはもちろん、店舗デザインやロゴにも思い入れがたくさん詰まっている。

◎えだおね

荻窪荻窪5・23・1

荻窪駅南口商店街に2013年に開店した新しいパン屋さん。店長の竹内さんのお店作りのコンセプトは明快だ。ゆったりとパンとコーヒーを楽しめるお店。テイクアウトのパンだけ考えるのでもなく、カフェだけ考えるのでもなく、両立させている。通路幅が広いのは子供連れのお客さんを意識して。

このお店を始めるに当たり、出来るだけまちの人に合ったものにしようとまち歩きをしたところ、女性、特に子供連れや妊婦さんが多いことがわかった。やりたかったスタイリッシュな店を改め、温かみのある店を目指しデザインコンペで設計者を決めたという。

パンとの付き合い方の提案もしている。ある時は食事として、ある時はチーズとワインと一緒に。お店で体験して家で再現してもらいたいそうだ。

①

②

③

①外には木のアーチをくぐるスロープとテラス席、木サッシの内側にはモルタルと木の家具と薄緑の壁にペンダント照明。温かくも洗練された空間が拡がる　②アイランドの台には色とりどりのハード系のパン。焼き色が濃くカリカリ感が魅力的　③週替りのランチ。ほうれん草のポタージュに、3種のパンと3種のお惣菜と飲み物のセット

しあわせ和菓子手帖

文・写真　山田智子

「あー、おいしい」
思わず笑みがこぼれます。
そんな幸せなひとときを彩る和菓子のつくり手を訪ね、
お話を伺いました。

◎高橋の酒まんじゅう

店主　上村哲一（のりかず）さん

売り切れ必至の極上酒まんじゅう

うっすらと中のあんが見える酒まんじゅうを口元に運ぶと、ふわぁっと広がる麹の香り。午前中のうちに売り切れてしまうことも多い人気の酒まんじゅうをつくるのは、祖父の味を受け継ぐ二代目の上村哲一さんだ。包餡（あんを包むこと）して、自然発酵させて、蒸して、という昔ながらの製法で、その味わいを守り続けている。

「いまは包餡機もずいぶんよくなっているんですけれど、やっぱり手で工程を全部踏んだほうが、皮の香りがちょっと違うかな、と。それでずっと手でやっているんですけど、そうなると、どうしてもそんなには数がつくれないので」

そんな上村さんに、酒まんじゅうの魅力を尋ねてみた。

「うちのは小豆がいいんですよ。三鷹にあるあんこやさんから生あんを持っ

①

②

③

④

①②もともとは姫路で酒まんじゅうの卸売りをなさっていた先代と一緒に上京してきたというあん練り機。「HIMEJI King」のロゴ入り　③酒まんじゅうは一つひとつ、この場所でつくられていく
④売り切れも納得のおいしさ。事前の電話予約や地方発送も可

シェアしてつながるブックカフェ

文・写真　西牟田奈々

西荻窪の3つのブックカフェは、それぞれ形は違うがシェアという共通項がある。

「松庵文庫」は、2013年の7月に松庵に突如現れた古民家リノベカフェ。かつては塀に隠れてみえなかったので、素敵な建物があり驚いた。オーナーは近くに住む岡崎友美さん。この家に住んでいた音楽家が家を手放すことになったとき名乗りを挙げた。何の経験もなくはじめた商売だったが、今はカフェ、ギャラリー、物販、レンタルスペース等、皆が家をシェアし、日々たくさんの人が出入り

松庵文庫

①

②

③

④

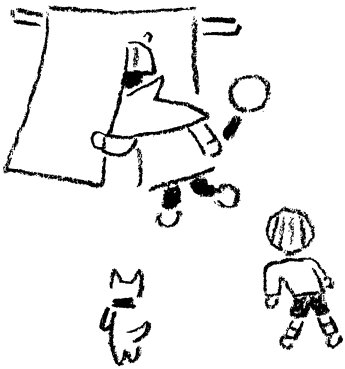
⑤

①毎週土曜日は玄関先でななまる商店が開かれる　②③建具は新旧様々とのことだが違和感ない。職人の成せる技が光る。家具はオーナー夫妻が集めたもの④本の本が集められたコーナー⑤ときには、パーティーや勉強会の会場に。この日は大皿でお料理も振る舞われた

入りにくいけどうまい店

文・写真　松原隆一郎

新しい街にはピカピカの飲食店が並び、どこもウェルカム。
店内の空気にも憂いはなく、するっと入れてしまう。
それに比べ歴史ある街には、なぜか入りくい店がある。
一見さんを遠ざけるオーラが漂い、それでいていつも
常連客で賑わっているような店。
気になって仕方がないではないか。
杉並区、とくに中央線沿いにはそうした店が多い。
オーラの正体は一見さんへの拒否の意志なのか。
ここでは入りにくくてうまい店の実態をご紹介したい。



◎やきや

荻窪5・29・3

この立ち呑み屋は以前には北口にあり、南口に移転した。北口の頃は狭い店内が薄暗く、カウンターにたどり着けなければ壁際にへばりついて飲むような感じだった。しかも注文しても、厳格な表情の女将さんはイカ等の焼き台を凝視して、ほとんど返事もしてくれない。それでも衝撃で釘付けになるのはイカ刺し、イカミミ刺しの鮮度と値段ゆえ。なんと170円なのだ。量は二人前分もある。ひと言でいえば、「必殺技を持つ店」。しかし客にとっては「空気の張った店」。この空気に慣れれば、絶品のイカにたどり着ける。

次々に入ってくるのは黒っぽいスーツに白いワイシャツのサラリーマン。店中がワイシャツで一杯になることもある。イカや鯖をつまみに冷や

『やきや』の看板が誘う

張り詰めた雰囲気の店内。奥に女将さん

酒をクイッとあおっては出て行く。帰り際、「また」と、それまで会話も交わさなかった隣客に囁く。互いに名も知らず、しかし毎日のようにここで会うのだろう。サラリーマン、かっこいい。

閉店したと聞きしょげていたら、まもなく南口に復活した。東側改札から地上に出て左前の商店街をしばらく歩き、左折したところ。13人は寄りかかれるカウンターが出来ても、女将は依然として健在。しかしネットで見てだろうか、若い女性もチラホラ来るようになった。いささか空気も丸みを帯びたかな？　なかには最難関である入り口付近で堂々と冷やをひっかける女性の猛者も現れるようになった。常連さんは興味津々でチラ見している。

「いかなんこつ焼き」「珍味わたあえ」「自家製塩辛」「うなぎきも焼」「きざみ穴子」など、飲み助にはクラクラくるようなメニューも並ぶ。一番奥は卓のようになっていて、座れる。同席したオジサンは、ご近所。ブラックニッカをボトルから注ぎ、そのまま飲んでいるのでギョッとしていたら、あらかじめボトル内で水割りにしてあるとのこと。「ここの女将はね、あんたにきついんじゃないよ。公平にきついの」。

ちなみにこの原稿の掲載依頼をしに営業時間外の昼間に訪ねたら、女将はうってかわってにこやかで拍子抜けした。中野店を経営するご主人と仲良く仕込みをしておられた。どうやら営業開始と同時に別の人柄が憑依するらしい。入

地域に開かれた新建築

◎大宮前体育館

2014年4月にオープンして8か月、設計者の青木淳さんに施設を案内してもらい、その後公共建築とまちについての話を伺った。

文・写真　西牟田奈々

4本の銀杏と2棟に配置された全体像

青木淳さん

――杉並に住んだことはありますか？」

青木　あります。下高井戸に小さいときに何年か住んでいました。この施設のプロポーザルのときには、周辺を数時間歩いて、どんな街なのか見て回りました。自転車が多いというのが最初の印象でした。まちには、新しい家、古い家、いろんな時代の違う家、大きさも違う家が建ち、自由な感じがしました。

――重層性がありますね。

青木　そうですね。また、自治意識の強さを感じました。皆がそれぞれの価値観と意見を持っていますね。

――美術館や体育館は利用者団体を相手に設計するのですね？

青木　ええ、美術館だったら日頃美術の活動をしている美術協会から、いろいろな要望が上がってきます。でも、その人たちの要望を聞くということで公共性が生まれるかと言えば、そうではなく、できてみて初めて使う人の声なき声を聞かなくてはなりません。体育館なら、歳をとっても健康でいたいと思う人がふらっと来れることが大切。そういうふうに、どんな住民にも開かれている場所であるべきなのです。ですから、普段使いのできる、敷居の低い建築を目指しました。」

――確かに昔ながらの体育館は入りにくい。建て替えがあって、新しくこういう建物ができれば、軽い気持ちで入ってこられる。私もこれから利用します。

◎

――館内に、パウチッコが貼りやすいようにしたそうですが、むしろ付け加えられていくことを許容しているのですか。

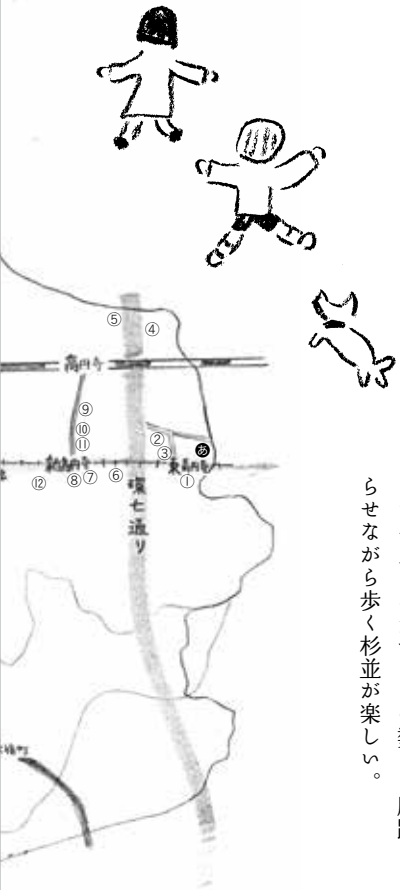
青木　デザインを守るために貼ることを規制するというのは本末転倒です。それで、手作りの案内が入ってきても大丈夫

いいビルマップ

浴風会からそのへんのビルまで

文　花房佑衣
写真　花房佑衣／三浦展

杉並のいいビルといえば、高井戸の浴風会や西荻窪の東京女子大学などが浮かぶ。一九二六年に竣工した浴風会本館は、クラシカルで重厚な趣を持ち、ドラマや映画のロケ地としても度々使用されている。東京女子大学は中央線からもその建物の一部を見ることができ、アントニン・レーモンド設計の建造物群は登録有形文化財に指定されている。しかし、いいビルとはこういった名建築に限らない。いわゆる「そのへんのビル」にもまた、愛おしくなるような味わいがある。特に、一九七〇年代のマンションを中心としたいいビルたちが、環八通りや青梅街道といった大通り沿いに多く見られる。バルコニー、窓、階段、タイル、銘板。レトロでモダンなデザインの数々に胸躍らせながら歩く杉並が楽しい。



① 茶色と白のコントラストが渋かっこいい

② 箱が積み重なったようなマンション

③ 銘板のための建造物

④

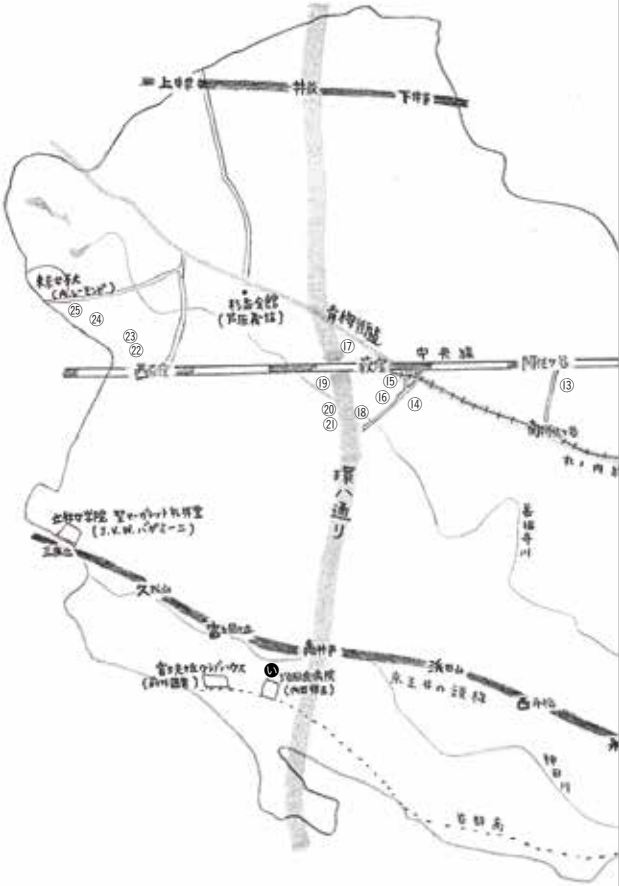
60年代前半のマンション

⑤

長い間使われていない様子。もったいない

⑥

イタリアファシズム建築風アーチ



⑨

高円寺のいいビルといえばこれ。コルビュジエ風

⑧

昭和レトロタイル萌え

⑦

タイムワープしそうな奥行きあるエントランス

レトロな名邸宅

文　花房佑衣
写真　花房佑衣／三浦展

荻窪の活気ある駅前から少し離れてみると、お屋敷と呼ぶにふさわしい立派な住宅が立ち並ぶエリアにたどり着く。また、街全体がレトロな空気を漂わせる西荻窪にも、駅から商店街を抜け少し歩いた先に邸宅街が存在する。これらの邸宅街を歩いていると、見越しの松が威厳すら感じさせる純和風邸宅もさることながら、洋館や和洋折衷の邸宅が目を引く。大正～昭和に建てられたものが残っているのだ。杉並らしい魅力的なまちなみづくりに貢献している建物に与えられる杉並「まち」デザイン賞を受賞したものや、登録有形文化財に指定されているものも多い。現在はレストランとして知られているビストロ・オヂこと荻窪の末光邸は、その代表格である。施主自身の設計で建築されたこの洋館は、築後九十年経った今もお洒落で美しい。また、昭和の名邸宅である西荻窪の一欅庵（きょあん）は、定期的にイベントが開催されたり、無料開放日が設けられたりして、気軽に足を運べる場所として親しまれている。戦前から築かれた品格ある邸宅街は、穏やかに包み込んでくれるような優しい雰囲気を持っている。

名前のとおり大きな欅の木が目印の一欅庵

末光邸からは楽器の音色が漏れ聞こえてきた
まるで映画のワンシーンのよう

西荻窪の邸宅

神明中学オブジェの謎

文・写真　西牟田奈々

「屋上に上がらせて欲しい」そう頼まずにはいられない訳が、区立神明中学校の屋上にある。下から見上げると、なにやら屋上にへんてこな形のオブジェのようなものがみえるのである。それは、形こそちがうが、フランス マルセイユにあるル・コルビュジエ設計のユニテ・ダビタシオンの屋上のオブジェを彷彿とさせる。何度みても気になり、ユニテのまねでは？　という疑問にどうしても答えが欲しい。航空写真でみても何かはわからない。そこで、学校にお願いしてみる。学校側もそのオブジェについては、謎であり、だれも追及したことがないという。上る当日までに、図面を探しておいてくれるということになった。

そして、ついに謎に迫る日が来た。屋上に上がると、階段室の屋根の上に、2つの同じ形の物体が並んでいる。これは、給水タンク置き場に違いない。ざらっとした表面ではあるが、きれいな局面にコンクリートが打たれている。さらに図面を見せてもらうと、貯水槽詳細図が見つかった。現在は水槽が外され、給水もポンプ式になったので、台だけがオブジェのように取り残されたのだった。オブジェでなかったことに、少しがっかりしたのであったが、設計時期などを確認してみると、昭和36年の図面であるので、モダニズムの流れに乗っている可能性はある。窓上部や扉上部の庇のデザインもまた、同じ鉄筋コンクリートでつくられ、モ

西荻窪の街フォント

文　ミリメーター（笠置秀紀＋宮口明子）

街の風景から文字を集めて、
その街の書体を作るプロジェクト
「街フォント」西荻窪編の決定会議の様子です。
文字の作り出す風景から、西荻窪と杉並の
なにかが見えてくるかもしれません。

杉並比較・荻窪問題

宮口　西荻窪や中央線沿線の街の印象ってどんな感じですか？

池谷　西荻窪はひらがなっぽいお店が多い印象だよね。

笠置　高円寺とか阿佐ヶ谷も意外とひらがなカタカナが多かった印象があります。アルファベットは少なかった。

三浦　そうかなぁ、古着屋はひらがな無さそうだけど…。確かにしゃれた英語の名前はなさそうだよね。フランス語とかは特に。西荻窪も英語ではない。阿佐ヶ谷はカタカナの古くさいのが多い。

大塚　西荻窪は意外と南口の柳小路にある文字が集まっていませんね。アルファベットはないのかな。阿佐ヶ谷は昔からの人が多くて、年配の方も多いですからね。

三浦　阿佐ヶ谷の北口もごちゃっとした飲み屋が多い。おしゃれっぽくはないからアルファベットがない。60年代、70年代の感じだね。

大塚　逆に南口駅前は大きなものばかり建っていてあまり魅力的じゃないんですよね。

水野　家賃も高いですよね。大人っぽい印象です。

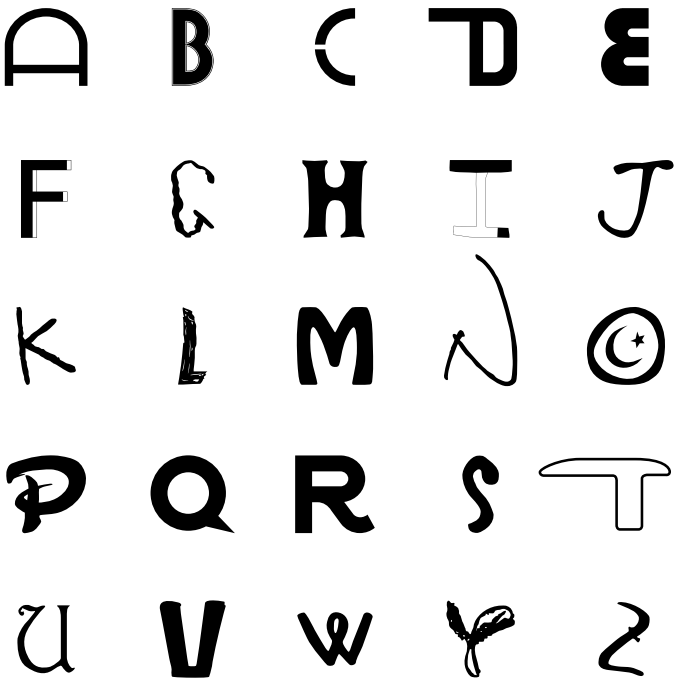
三浦　新しい店もあんまりできてない。西荻窪はそれなりに新しい店が多いけど、阿佐ヶ谷は古くさい。それに対して高円寺はサブカル系。

三浦　杉並フォントでひとつにまとめるのもありだけど、やっぱり分けた方が良いかもね。「ラバーソール」とか絶対に高円寺しかありえない。西荻窪には若すぎる。高円寺は若すぎて、おどろおどろしくもなったりする。阿佐ヶ谷は大人で、西荻窪は幅広い。

宮口　西に行くに従って、だんだんニュートラルになっていくんでしょう

三浦展　消費社会、都市、郊外、世代の研究者。一九八八年に吉祥寺に引っ越してきて以来、西荻の古道具屋と古本屋と居酒屋を愛し、二〇〇六年事務所を西荻に移転。

西荻窪フォント



街フォントとは

街の風景から文字を集めて、その街のフォントを作るプロジェクト。日本の都市風景の大きな部分を占める看板が作り出す風景を切り取り、フォントとして再構成することで、その街らしさを浮き彫りにする試み。ミリメーターが2008年より開始。吉祥寺、小金井、渋谷、広島でフィールドワーク、フォント化が行われている。2014年より西荻窪、阿佐ヶ谷、高円寺も始動。公式サイトではフォントのダウンロードと、文字の画像を投稿できる。
http://mi-ri.com/font/

水野哲也　クセ毛で眼鏡（+たまにヒゲ）の本書デザイン担当。本を愛するまじめなエディトリアルデザイナーです。西荻窪在住在勤。

編集後記

この本を無料で配布していいのでしょうか。あまりに充実した、あまりに多角的な、あまりに多様な執筆者による、あまりに独創的で愛着に満ちた杉並本ができたと思います。

それぞれの執筆者が街に対して独特のスタンスを持ち、独自の研究を日常的に繰り広げています。その途中経過を書いていただきました。

時間と紙幅と予算の制約がなければ、この十倍以上のことが書けたはずです。杉並はそれくらい深いです。

また、この本をきっかけとして、杉並の街歩き、商店街歩き、あるいは空き家、空き店舗を埋める事業も考えたいと思っています。

そして機会があれば、別の街でも同じようなことをしたいと思います。ご関心があればお声がけください。

写真＝水野哲也

編集人
三浦　展　社会デザイン研究者／西荻在勤

執筆者（50音順）
宇田川新聞　イラストレーター／父は荻窪出身
大島　芳彦　建築家／浜田山在住
笠置　秀紀　建築家／吉祥寺〜高円寺間の高架下が好き
西牟田奈々　建築家／西荻好き／『高円寺 東京新女子街』共著者
花房　佑衣　建築系会社員／高円寺在勤
深澤　晃平　編集者／高円寺・松ノ木・阿佐ヶ谷育ち
松原隆一郎　社会経済学者／阿佐谷在住
水野　哲也　エディトリアルデザイナー／西荻在住在勤
宮口　明子　建築家／親友が住んでいた阿佐ヶ谷が青春の思い出
山崎　亮　コミュニティデザイナー／本籍は西荻窪
山田　智子　編集者／西荻周辺散歩好き
吉村　生　暗渠研究者／西荻、荻窪、高円寺在住経験あり

発行所
株式会社カルチャースタディーズ研究所
〒167-0042　杉並区西荻北2-9-15-301

2015年2月28日発行

印刷
藤原印刷株式会社
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町2-4-5

定価：無料

本書は「杉並区チャレンジ商店街サポート事業補助金」によって制作されました。